

EurekaIX

六年制通信 No.11 令和3年6月25日(金)号

レンガ職人

先週でしたかな、最終回は。「イチケイのカラス」というドラマを観ていました。型破りの裁判官が主人公。昔 HERO という、検事を主人公としたドラマが流行り、のち検事志望が増えたいからです、今後は裁判官になりたがる若者が増えるのですかね。それはいいのですが、この最終回で懐かしいエピソードが紹介されていました。仕事とは何かというテーマで、旅人が三人のレンガ職人にたずねるという話です。「何をしているんですか？」とたずねる旅人に最初の男は「親方にレンガを積みと言われてるから積んでいるんだ」、二番目の男は「レンガを積むのは金のためさ」、最後の男は「教会の大聖堂を作るんだ。時間はかかるが、これができるみんな喜ぶだろう」とそれぞれ答えます。その十年後、最初の男は相変わらずぶつぶつ言いながらレンガを積み、次の男は金になるかもしれないがもっと危険な屋根の上で仕事をし、最後の男は多くの職人を使う現場監督になっていた、そういう話です。要するにどういう心持ちで仕事をするかが大切だという話ですね。ただ、この話は昔からイソップ寓話と誤解されていて、一体どうしてなのでしょうね。紀元前 6 世紀のイソップが教会の大聖堂など知るはずがないではないですか。

「イチケイのカラス」を観ていても一つ思い出しました。どこを見て歩くかという話です。ある学者が学問の志を持って京都から江戸に向かったのですが、歩き出してからすぐ、物見遊山の旅人に会います。しばらくその人たちと言葉を交わしながら歩いていくと、やがてみんな彼の歩く速さについてこられなくなりました。別に彼だけが特別早足で歩いたわけではないのですが、気がつくやうに常に集団の先頭になり、後ろが見えなくなるほどの差がついてしまうのです。そして、彼の偉いのは、このわずかなできごとから、学問の本質を見抜いた点にあります。何故歩く距離に差がついたのでしょうか。彼はこれを「どこを目指して歩いていたか」によるとしています。物見遊山の連中は京都のはずれくらいを目指して歩いていたのですが、自分は今から江戸に向かわなくてはならない。その心構えが既に違うのだというわけです。遙か遠くを目指して歩き出している自分には、京都のはずれであろうと琵琶湖のほとりであろうとほんの通過点に過ぎません。物見遊山の連中がゴールとする地点とは比較にならない遠くを目指している。だから足に気迫があったのだ、と彼は言うのです。学問の道も同じです。初めの一步を踏み出そうとすると、どこを見て歩き出すかがその後大きな差となって現れます。遙か遠くを見て勉強している人の足取りは、強く弛むことなく、この辺でいいだろうという妥協もありません。やがては歩む距離に大きな隔たりが出るは

ずです。彼は江戸へ向かう自分の気概と遊びで歩いている人との差をもって、学問の戒めにしたのです。そしてこの体験談をのちに書き残しています。彼の名は柴野栗山、江戸中期の漢学者で 1807 年に没しています。君たちは寛政の改革（1787-1793）というのを授業で習ったと思います。江戸時代に行われた三大改革の一つです。享保の改革、天保の改革の次になされた最後の大きな改革で、田沼意次の失脚後に老中となった松平定信が主導したものです。徳川第 11 代将軍家斉の治世で、当時の学問界にも非常に大きな影響を与えた「寛政異学の禁」（幕府の学問を正式に朱子学と定めた）を強引に行ったのが柴野栗山でした。松平定信に請われて、当時仕えていた徳島藩から江戸に来たのですが、おそらく先の旅の話はその途中の出来事だと推察されます。実はこのエピソードは、30 年以上も前に知ったのですが、長い間忘れていました。それが先日ふと思い出したんですね。このごろは新しいことは次々と忘れていくのに、昔のことが脈絡もなく思い出されたりします。間違いなく老化現象ですね。

栗山はまた学問に対する三つの戒めを残しています。

これら三つの戒めは「進学の喩」とか「進学三喩」とか言われ、今に伝わっています。

進学三喩 ・志は遠大にして日々これに勤むべし

・初めに謹みて正道より入るべし

・小成に安んぜず大成を期すべし

学生の頃進学三喩を習っていたのに、栗山との結びつきが長い間欠落していました。どうして思い出したのかわかりませんが、君たちにもこの三つの教えを紹介しておきます。何度か口に出して読んでごらんください。

今週のおすすめ

・鈴木治雄 『昭和という時代（上）（下）』（中公文庫）

鈴木治雄の対談集。鈴木さんは財界人ですが、読めばわかりますが非常に教養のある方ですね。令和を生きる君たちが昭和の話を、それも対談者の多くが大正生まれという、古い古い思い出話を読んで何を思うのか。是非聞かせてほしいですね。

戦争に負けて何もかも失った時代、「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた古橋廣之進がアメリカで世界記録を出すんですね。水泳です。古橋さんは生涯で 33 回の世界新を出しています。まだ胸に日の丸をつけてアメリカの街を歩いたら命が危ないのではないかと言われたころです。ロサンゼルスで世界新を出した時のアメリカ人の反応がこの本に書かれています。是非読んでごらん。ほほお、と思いましたね、私は。

『美味しんぼ』という漫画の海原雄山のモデルが北大路魯山人であることは有名ですが、魯山人を張り飛ばした女性がいるんですね。白洲正子さんです。この方のご主人である白洲次郎さんは近代史に出てきますから学校で習うはずですよ。小林秀雄のいところですね。小林が「隠居を英語で何と言うんだい」と聞いたら「そりゃ a country gentleman だろうね」と答えたというエピソードがあります。この本じゃないけど。

全部で 24 名の方が登場します。君たちもけっこう楽しめると思うんだがなあ。

BGM は Lipps Inc. の *Funky Town* でした…。